あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250－23
04(7182)
0861

令和５年度総会終了

6月9日、午後4時から我孫子市民プラザホールにて令和5年度の総会が開催された。

司会の開会宣言の後、牧田宏恭幹事（役員）が議長に選出され議案の審議に入った。当日提示された議案と採決の結果は以下の通り。

第1号議案　令和4年度事業報告

1，白樺文学館との連携強化と同文学館リニューアル方針への協力

・令和4年5月から会報「あびこの文化」に白樺文学館・稲村隆学芸員による「稲村雑談寄稿―我孫子の文化を守る会へ―」を4回連載した。

・令和5年1月から会報「あびこの文化」に平林清江氏（会員）による「世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る」を連載中。

・以上の外、会報などで白樺文学館リニューアルについてPRした。

2.『我孫子の文化四十年の歩み』のPRと販売支援

・作成費用の全額を販売により回収した。

3．地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生

特に平将門に注目し研究を進め、講演会を実施した。

・2月4日（土）「市民のチカラまつり」の一環として講演会「各地の将門伝説・伝承を探る（その2）」を、秩父市、取手市から講師を招き、近隣センター「ふさの風」で実施した。

4．史跡文学散歩の実施（年4～5回予定）

・コロナ禍で実施できなかった。

5．放談くらぶの開催（原則、偶数月、午後2時～）

・以下の講師、内容で6回開催した。

4月24日（日）　関口　一郎氏　「我孫子宿・水戸道・成田道「追分道標」の保存活動について」

6月18日（土）　村越　邦雄氏
「手品の実演＆トーク「昔の我孫子」」

8月21日（日）　倉岡　裕之氏
「山岳ガイドという仕事」

10月22日（土）　荒井　茂男氏
「我孫子の地名あれこれ」

12月11日（日）　村上　智雅子氏
「新田次郎が我孫子で過ごした五年間」

2月11日（土）　関　英昭氏
「日本社会は男女平等？」

6．文学の広場掲示板への短歌6首掲示（年3回）

・手賀沼沿いの若松地区「文学の広場」掲示板に年3回、6首を1ヶ月間掲示した。

7．「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」への参加

・従来、斎藤清一役員が運営委員、理事として参加していたが、体調不良のため急遽、美崎大洋会長が理事として、牧田宏恭役員が運営委員として参加した。運営委員会は毎月、理事会は3か月に1回実施されている。

・10月7日（金）手賀沼流域フォーラム実行委員会として「川巡りと木下の史跡散歩」を企画したが、当日、雨天のため中止となった。

8．文化活動関係団体との連携協力

・市内市民活動団体の我孫子市史研究センター、我孫子の景観を育てる会、あびこガイドクラブ、ふるさと我孫子ガイドと当会の5団体で「郷土資料館」設立の必要性を確認し、情報交換のための交流を継続している。

・2月14日、5団体として星野市長に面会、上記「郷土資料館」の設立を要請した。

9．プロジェクト活動の活性化

・コロナ禍のため多くのプロジェクトは開催されなかったが、「短歌の会」は2か月毎に開催され、毎回10人前後のメンバーが出席した。

10．白樺派についての継続的研究・勉強

・会報「あびこの文化」に白樺派関連の記事（前掲）を掲載した（現在連載中も）。

11．我孫子市生涯学習出前講座の推進

・コロナの影響もあったが、1回実施された。

8月31日（水）美崎　大洋講師「杉村楚人冠の紹介」、「我孫子校友会」からの要請。

その他

○総会・文化講演会実施

一時、コロナ感染者の減少傾向が見られたため、一堂に会しての総会を実施した。

令和4年度総会　6月5日（日）16時～

同時に第40回文化講演会も開催した。

以下はその内容。

文化講演会　6月5日（日）14時～

講演「村川別荘と我孫子・嘉納治五郎との絆をたどって」講師　村川　夏子氏

以上につき美崎大洋会長から逐次報告がなされその後、採決の結果、提案通り可決承認された。

第2号議案　令和4年度決算及び監査報告

決算の内容について稲葉義行会計幹事から説明があり、その後、芦崎敬己監査役から「適正に処理されている」との監査報告があった。その後、採決の結果、原案通り可決承認された。

第3号議案　役員選任（案）

（会長）美崎　大洋、（副会長）村上　智雅子、佐々木　侑、稲葉　義行（会計幹事）

（幹事）戸田　七支、斉藤　清一、牧田　宏恭

（会計幹事）佐藤　やす子

（監査）芦崎　敬己、飯高　美和子

（退任）伊藤　一男

（名誉会長）三谷　和夫　（顧問）越岡　禮子

採決の結果、提案通り可決承認された。

第4号議案

「脇本陣を引き継ぐ文化事業積立金」の一般会計繰り入れ（案）

会長による議案説明の後、本議案の内容について「会員が本件の経緯、詳細を理解していないのではないか

と」の質問があり、本総会での採決はせず、後日、条件付きの「会長一任」とすることになった。ついては会長は本件の経緯と承認・不承認の結果について会報に掲載することになった。（以下その内容）

脇本陣を引き継ぐ文化事業積立金」の経緯

「我孫子宿脇本陣の保存運動」

平成十一年一月初に、我孫子宿脇本陣（我孫子市本町三丁目十－十六、小熊正光家所有）が相続税のために物納対象となっているとの話があり、これを聞いた我孫子の文化を守る会（三谷和夫会長）は、我孫子市教育委員会と協議、署名運動を進めることとなる。そこで、地元町内会、我孫子市文化連盟ほかの文化団体約六十に呼びかけ、一月三十日に三十団体ほどの参加を得て説明会を行い、我孫子市議会に脇本陣の保存活用について請願するため署名への協力を訴えた。また市民の要望に応えて二月十一日と二十四日に脇本陣の特別公開を実施した。十一日は雨天となったが、両日で約一五〇〇人の見学者が殺到し、大変な活況を呈した。我孫子市周辺はもとより、遠く千葉市、東京、また茨城、埼玉県などからの参加もあり、一般市民の外に、建築学者、大工棟梁、博物館職員、地方史研究者など多岐にわたり、保存、調査、活用について協力の申し出もあった。なおこの後も見学希望の声が後を絶たず続いている。（略）

署名運動は、次から次へ燃え上がるようにその輪がひろがっていき、また我孫子市内の学校ＰＴＡの力添えがあり、一か月の間に当初の目標の五千名を大きく上回り、結局二万三千百三十四名にも達する署名簿が集まった。（略）

かくして書式に従い、請願書を署名簿とともに、我孫子市議会事務局に提出した。（略）

三月十八日に市議会本会議があり、討論採決の結果、可決採決と決せられた。（略）

我孫子の文化を守る会は我孫子脇本陣が資料館として円滑に運営されるように、「我孫子脇本陣基金」の特別会計設立を五月の総会に提案し承認された。多くの市民から寄付金が寄せられつつある。同時に我孫子宿の歴史や文化財としての価値、またその活用のありかたについて学習を進めようと会員はじめひろく市民に呼びかけている。（略）（『我孫子の文化を守る会二十年の歩み』から）

その後、小熊家では相続税については自宅の物納ではなく、別の手段で納めることになり、「資料館」としての転用・使用も考えていないということになり、結果として本積立金が宙に浮いたことになった。」

（結論）

以上の経緯を踏まえ、一任された会長は、長い間特別会計として保管・管理していた積立金について、一般会計への繰り入れが妥当と考え、本議案を承認した。

第5号議案　令和5年度事業計画（案）

1. 総会、文化講演会の開催
2. 白樺文学館との連携強化と同文学館リニューアルへの協力
3. 会員の増員・増強
4. 地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生
5. 史跡文学散歩の実施（年4～5回予定）
6. 放談くらぶの開催（原則、偶数月、土曜日または日曜日午後2時～）
7. 文学の広場掲示板への短歌6首掲示（年3回）
8. 「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」の活動テーマへの取り組みと行事参加
9. 文化活動関係団体との連携協力
10. プロジェクト活動の活性化
11. 白樺派についての継続的研究・勉強
12. 我孫子市生涯学習出前講座の推進

以上の事業計画（案）について美崎会長から示され、その後、採決の結果、提案通り可決承認された。

第6号議案　令和5年度　予算（案）

稲葉会計幹事から説明があり、原案通り（第4号議案の承認条件付き）可決承認された。

（第2号議案、第6号議案については別紙参照）

文化講演会
「白樺派の文人たちの我孫子時代・その後」を聴講して

稲葉　義行

我孫子の文化を守る会の総会に先立ち、文化講演会を開催した。講師は作家・地域史研究家　山本鉱太郎氏で演題は「白樺派の文人たちの我孫子時代・その後」です。（以下その概要）

今では、我孫子の手賀沼は生活雑排水で日本一汚い沼として知られているが、大正のはじめ頃は砂底から湧水が噴出し、白魚等が住むほどの、水の澄んだ美しい沼であった。夕方には、沼に逆さ富士が映り、周りの丘や森もシルエットとなって旅情また一入であった。

明治四十三年に柔道の講道館を興した嘉納治五郎が初めて訪れ、東京から汽車で一時間ほどの我孫子の手賀沼の美しさに目を付け別荘とした。その治五郎の姉が柳宗悦の母で、治五郎の勧めもあり、柳宗悦の姉直枝が別荘を持ち、そこへ弟の宗悦夫妻が引っ越してきた。来てみれば、治五郎がロンドンのテームズ河畔に似ているとほめただけのことがあり、とりわけ高台から見る手賀沼の夕陽が美しかった。

水は澄んでおり、ワカサギ・ヤマベ・ウグイ等が獲れた。また、野鳥も多く、シラサギ・雁・ヨシキリ等、多くの鳥が姿を見せた。夜は満点の星月夜、夏の夜は蛙の大合唱で、当時は電気がなく、ランプとカンテラで、柳はランプの下でウイスキーを楽しんでいた。

その後、東京から近く、素晴らしい自然が残っているということで、人生の一時期、理想主義を標榜する白樺派の人々が我孫子に多く住み着いた。先に引っ越してきた柳宗悦をはじめ、小説家武者小路実篤、志賀直哉ら白樺派の人たちをはじめ、中勘助、滝井孝作、陶芸家の河村蜻山（せいざん）、後に最高裁長官となった田中耕太郎、評論家の杉村楚人冠らも住み、そのことは多くの文学作品に描かれている。

そして、イギリスの陶芸家バーナード・リーチも我孫子に窯を持ち、晩年、我孫子時代がわが生涯で最も充実し、思い出深い楽しい日々であったと述懐している。

志賀直哉は、大正四年九月二十七日、柳の勧めにより我孫子にやってきた。場所は通称弁天山というところで、眼下に手賀沼が一望できる。ここから沼を渡って来る渡しも良く見える。二十五、六坪ほどの茅葺の家を建てて住み、暇さえあれば柳の家に行って文学談議に明け暮れた。志賀は我孫子に移住する前、上州の赤城にいてノイローゼになっており。妻の康子(さだこ)もノイローゼであった。それを見かねて、柳は志賀夫妻を我孫子に呼んだのである。ノイローゼの原因は父直温(なおはる)との徹底的対立にあった。学習院高等科時代、足尾鉱毒事件を視察に行こうとしたが、祖父直道が古河市兵衛と足尾銅山を共同経営していたという理由から父に反対された。東大時代、我が家の女中との結婚にも反対され、大正三年京都の勘解由小路 康(かでのこうじ さだ)との結婚にも反対され、事毎に二人は対立。我孫子に来てからは、長女の慧子(さとこ)が亡くなるという不幸まで重なった。しかし、手賀沼の自然が志賀の心を和らげた。また、次女も生まれ、その後、父ともようやく和解にこぎつけた。泥沼状態であった親子関係にも光が見えてきた。

武者小路実篤は大正五年十二月二十日、三十歳の時、手賀沼に引っ越してきた。杉木立に囲まれた静かな丘の上に居を構えた。庭には泰山木や藤、梅、楓等の樹々があり、ここからも手賀沼が良く見渡せる。その頃、武者小路は肩が凝ったり、微熱があったりで体の調子が悪く、医者は結核と診断。親友の志賀に転地療養を勧められて、我孫子にやってきたのであるが、実は、医者の誤診であった。しかし、学習院高等科時代からの親友の志賀や柳たちと近くに暮らせるということは嬉しく、住むことにした。

同じく白樺派で、イギリス人の陶芸家バーナード・リーチは英国留学中の高村光太郎と知り合い共感して、日本に郷愁を抱くようになった。大正五年十二月、柳の庭に窯を築くことになり、我孫子にやってきた。月曜から金曜までは柳の家に寄宿し、土曜、日曜は東京原宿の自宅で妻のミュリエルや子供たちと暮らすことになった。

こうして、我孫子白樺派が誕生しここから多くの優れた作品が世に送られていった。

志賀直哉の傑作はほとんど我孫子で書かれている。「城崎にて」、「赤西蠣太」、「雪の日」「小僧の神様」そして、やがて後のライフワークとなった「暗夜行路」も我孫子の地で書かれた。柳・志賀・武者小路・リーチは毎日のように文学談議に明け暮れていた。

しかし、やがてそれぞれが我孫子の地を去ってゆく時が来た。

大正七年九月、武者小路実篤が、一定の労働をすれば、衣食住が平等に保障され、自由に余暇を過ごせる「人間らしい生活」のできる原始共産社会の夢を見て、新しき村運動のため九州の日向に去った。新しき村の構想を志賀には相談しなかったようである。新しき村では、妻房子と離婚をし、村に入ってきた安子と結婚、翌年長女が誕生し、満足感のある生活であった。村民も十八人から三十七人に増加した。しかし、コンサート、演劇、講演会等を実施したが、金がないので大変苦労したようである。新しき村は昭和十三年のダム建設により昭和十四年に一部が埼玉県毛呂山に移転した。

バーナード・リーチは大正八年五月、窯の焼失にあって悲しみのうちに東京に戻り、黒田清輝邸に窯を築いたが、翌年、イギリスに帰国し、セントアイヴスに登り窯を築いた。

柳は大正十年三月、東京で一人暮らしをしている老母と生活をするため、東京赤坂の高樹町へ帰った。そして、民衆が生み出し使用した工芸に、美のみならず、深い精神性や宗教的真理を見い出す民藝運動で、大正十五年浜田庄司、河合寛次郎、棟方志功らと出会う。

志賀は大正十二年三月、京都へ転居していった。その後、奈良へ移住、滝井孝作、尾崎一雄、小林秀雄ら大勢の文人が集うことになる。その中には志賀に心酔していたアナキストの小林多喜二も参加していた。

このようなことを思い合わせると、大正期の我孫子は大勢の芸術家が集い、一大文化村を形成し、日本の文学史上重要な役割を担ってきた地域であった。

アンケート結果

今回の文化講演会では、60名の出席の中、35名の方からアンケート回答がありました。

質問1の「全体的な印象」については、大変良かった18件、良かった13件で、合せて31件(88・6％)の方から高評価がありました。他ほ、普通が2件でした。

質問3の「講演会資料」についても、分かり易い17件、良かった14件で、合せて31件の高評価でした。

質問2の「印象に残った内容及び自由記述」では、『バーナードリーチが印象に残りました』や『志賀直哉の葬式のエピソードが面白かった』。『志賀直哉と小林多喜二との交流は新鮮でした』。『特に武者小路の「新しき村」出立の前後のエピソードが興味深かったです』。『小林多喜二が奈良まで志賀直哉に会いに行った交流は新鮮でした』【同様1件】。『「新しき村」の埼玉県に移った後がどうなったのかも知りたかった』。(山本先生が)『ご高齢にもかかわらず、白樺派のことを情熱的に語られ、感動しました』など。

多くの方の回答協力に感謝申し上げます。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（連載第3回）

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その2

加藤充子氏が語る、聚文画室（旧桜丘原田京平宅）の紫陽花のこと》

平林　清江（会員）

苔より色づきゆくを見てありし
紫陽花の花今さかりなり

原田和周著「雲の流れ」昭和九年

はじめに

夢のような楽しい表現に誘われて、さらに書き進めたシリーズ《その2》

画家・歌人原田京平の遺歌集「雲の流れ」の奥付に書かれた住所表記のみを手がかりに、世田谷区民の方々からの情報を得て、令和元年（二〇一九年）十月二十一日、「画家・歌人　原田京平とそのファミリーの旧宅跡地（現　加藤様邸＝Kフラット＝東京都世田谷区桜丘四-九-三十六）探訪・取材」を実施した。

Kフラットのオーナー加藤充子氏の貴重なお話をヒントに、原田京平ファミリーが「世田谷の頃」に住んだ住所の確定、並びに暮らしの解明に重点がおかれ、その方法は「雲の流れ」に掲載の短歌と、妻原田睦の「年譜」を用いてのものとなり、「世田谷の頃」の原田京平ファミリーを知るための第一歩を踏み出せたと感じている。

幾田氏からのメール（感想文）に触発される

その後、この「探訪・取材」に同行してくださった、世田谷文学館友の会企画委員（現・同会副会長）の幾田充代氏から、「桜丘」という土地について、次のような楽しい表現の感想文が送られて来た。それは、夢のような楽しい表現であった。

「京平さんが選ばれた旧居場所、そこは、世田谷でも憧れの「武蔵野台地」だったんだなあ、と思います。同じ世田谷に住んでいて思うのですが、しかも、私は、世田谷でも三つの峠の茶屋があったというそれなりの丘陵地帯の三軒茶屋に住んでいますが、「武蔵野台地」に吹く風と広い空は格段に魅力があるように、今も時々思い出します。下界と宇宙の狭間、渚地帯、楽園、……。とにかく別世界に居るような感覚です。」

（二〇二〇年一月二十一日　筆者宛メールより）

この感想文におけるキーセンテンスは、「武蔵野台地に吹く風と広い空は格段に魅力がある」ということになるが、取材当日、筆者も大いに感じたものであったが、ドライではあるがやさしい風の心地よさ、そして空が広くて近いという感覚は、今でも思い返すことができる。さらに、「下界と宇宙の狭間」という表現に触発されたのである。

桜丘と我孫子町弁天山との環境の相違

さて、この幾田氏のご指摘をいただいて、筆者はある事に思い当たった。それは、原田京平ファミリーが、世田谷に移住する前に居住していた、千葉県我孫子町弁天山の家の周囲の環境との相違である。

弁天山は、小さな山を削ってできた土地で、後ろの山（崖）からは絶え間なくきれいな湧き水が湧き、水の豊富な場所であった。　家の前には細い道が続き、その向こうは湿地あるいは田んぼが二、三枚ひろがり、そのまま手賀沼に続いている。当時、京平ファミリーが住んだ弁天山の家は、白樺派の小説家志賀直哉の別邸（**注1**）で、実に水に恵まれた場所であり、その水を十分に利用して暮らしていたのである。

また、弁天山志賀直哉邸は多くの木々に囲まれていたようであるが、現在でも鬱蒼とした緑に囲まれ、濃密な空気感に満たされていて、家があった場所の背後には湧水を溜めた池があり、夏でも薄暗く、涼しい環境である。吹く風は、高台の桜丘のやさしくドライなそれと違い、なんとなく湿っぽく、重くウエットである。

この場所で、京平と睦は、大正十二年三月頃から昭和三年三月までを暮らし、二人の娘を育て、画を描き作歌をし、また多くの交友を楽しんだのである。

画家夫妻は、桜丘にいかなる「楽園」を構成しようとしたのか？

やがて、昭和三年三月、京平・睦夫妻が幼い娘二人を伴って、我孫子町を離れ上京、初めは世田谷若林（番地は不明）に住むが、昭和五年三月、世田谷五丁目二八四九番地（現　世田谷区桜丘四-九-三十六）に三〇〇坪の土地を求め、聚文画室（**注2**）を建て転居し落ちついた。

幾田氏のことばを借りれば、「下界と宇宙の狭間」のような場所に、住まい兼アトリエと庭を作り、「多くの木々を植えたという」ことである。

この画家夫妻は、この桜丘でどのような自身の「楽園」を構成しようとしたのであろうか？

加藤充子氏からの手紙にあったヒント

さらに、二〇二〇年二月六日、加藤充子氏からお手紙をいただいた。それは、原田京平が桜丘に建てた家の庭にあった多くの木々や花々について、詳しく書いてくださったもので、充子氏のお人柄のように魅力的で素敵な内容であった。

それ故、筆者が一人で読んで済ましてしまうには、余りにもったいなく思われたので、このお手紙の内容を核にして、シリーズ《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る》を、さらに書き進めたいと考えたのであった。

筆者のレポートの参考になれば、と充子氏が加藤家にはじめて足を運ばれたという、昭和三十三年当時から庭に植わっていた樹木について、記憶を辿り心に浮かぶまま、詳しく書き記してくださったものである。

なかでも、原田京平ファミリーが桜丘に住んでいた頃に、京平・睦夫妻が特に好み、選んで植えたと思われる「紫陽花」のエピソードが記されてあるが、原田睦の作品集「原田睦　八十八歳自選画集」には、紫陽花が何点も描かれていることに留意すると、見逃せないエピソードである。

シリーズ《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その1》でとりあげた「庭には多くの木々が植わっていた」という事柄に対して、より明確に、さまざまな木々や花々の種類とその形状・色彩までを記し、展開し示してくださっているのである。

記された木々の種類は、泰山木、つつじ、柿の木、八ツ手、山椒、びわ、竹(やぶ)、かりん、楓、ぼけ、木蓮、栗、紅梅、白梅、椿、ざくろ、黐(もち)の木、八重桜、あじさい、まき(槙)、百日紅、そして金木犀など二十二種類にものぼる。実に多種多様で、その上多彩なのである。

この充子氏のお手紙の中に、何故京平・睦夫妻が桜丘に土地を求め、聚文画室を建て、そして、広い庭に様々な木々や花々を植えたのかが、想像できるヒントが有るように思えたのである。

一、加藤充子氏の手紙で明確になった聚文画室の庭の構成とその意図

(1)手紙に書かれた聚文画室の庭のたたずまい

「色々お話ししたいことがありますが、取りあえず、私が世田谷区世田谷五―二八四九に初めて足を運んだ、昭和三十三年当時(注3)から庭に植わっていた樹木について書き記します。

北側の庭にあったもの。(区道に接する玄関のある面。当時は舗装もされていない道路で、幅員も狭かった。(住居表示が変更になる前後に、道路に面する土地の所有者がそれぞれセットバックして建築基準法に合致するよう四メートルとした。)

泰山木、つつじ、柿の木、八ツ手、山椒、枇杷(実が長い形のもの)、竹やぶ、かりん、楓(普通のもみじ)、金木犀などなど。」

金木犀は、令和元年(二〇一九年)十月二十一日に訪問した際、ちょうど時季で花を付けていて、原田京平ファミリーが住んでいた頃からあったものだとのことで、感慨一入、花に見入ったものであった。

木犀の茂れる下に立つ百合の
つぼみやうやく太くなりたり
原田和周著「雲の流れ」昭和九年

「南東側の庭にあったもの。

隣地の竹やぶから時々越境して竹が生えて来る。ぼけ、木蓮(紫色のもの)、栗、紅梅、白梅、椿、ざくろ、黐(もち)の木、柿の木二本(東西に伸びた建物の正面の茶の間から見える場所に立っていて、初夏には新緑が美しかった。)枇杷(実が円い形のもの)。これは初冬に白い花をつけ、花の少なくなって来る季節の色どりとなっていた。

南西の庭の隅に当たるところに八重桜があり、可成の高木になっていた。その他、槙(まき)、百日紅(さるすべり)など。」

(2)加藤家育成の紫陽花と、原田　睦が描いた紫陽花の画

「紫陽花」は、今でこそ品種改良されて「隅田の花火」やら何やらと色々変わったものが出ているが、原田さんの御存命の時代には地味なものが多かったらしい。私は自宅にあるあじさいが当たり前のものだと思っていたが、隣家の奥さんに「加藤さんのお宅のあじさいは立派だ」と云われて、その家の花とくらべて見ると確かに、我が家の方が格上のようだった。原田さんが当時の珍しい品種を選んでお植えになったのかと思う。(画材として?)

このように察せられたのでKフラットに建て替える際、成田近郊の別宅(関東大震災で大変な被害をこうむった義母の意見で何かの時の避難先として建ててあった)にあじさいを持って行き移植した。その枝を又持ち帰って育成している。」

このお手紙の中で、特に印象的で、重要なのが「紫陽花」にまつわるエピソードである。原田　睦がその最晩年に出版した作品集に「原田　睦　八十八歳自選画集」(注4)があるが、紫陽花を取り上げた画が何点も描かれている。この作品集は一九五五年から一九八四年までの作品を集めたものなので、桜丘の頃の庭の紫陽花と直接結びつけて良いものかどうか分からないが、睦の紫陽花に寄せる思いには、並々ならぬものが有ったのではないかと感じられる。

おそらく、画の題材として大切なテーマ(モティーフ)の一つであったことは間違いないと思われる。京平と暮らした桜丘の庭に咲いていた、睦好みの紫陽花で、その変化に富んだ色彩や、吹く風により変容する花や葉のさまざまな様態に眼を注いでいたのだと想像される。睦晩年の作品に、「花に生きる　一九八一色鉛筆」がある。その他、紫陽花を描いた作品には、「円と花　一九七六」二点、「日輪　一九七九」などがある。

加藤家の人々は睦の画集を未だ眼にしていないと思われるが、紫陽花をことのほか大切に思い、育成されて、京平・睦夫妻の思いを引き継いで今日まで来られたのである。この、時を超えて、未だ見ぬ人と人とを結ぶ絆が、誠に不思議に思われる「紫陽花」のエピソードである。

「他に移したのは、木蓮、ぼけ、かりん、まき、変わった葉の楓等で、かりんは残念なことに枯れてしまったが、木蓮、ぼけは今のところ元気で毎年花を咲かせてくれている。百日紅は植木屋さんに手入れをしてもらっていないため、山で自生しているもののように背ばかり高くなってしまった。

北側の庭に八つ手の木が植わっていて、「そのかげに悪者が身をひそめているかもしれない！」といやがって、葉をむしっていた老齢のお手伝いも居たが、ごく最近知ったところによると、八つ手の花が初冬に白い花をつけると、その蜜は目白にとって、またとないご馳走であり、吸いにやって来るのだそうだ。

歳月を越えて庭を構成した人の意図が伝わってしみじみとした気持ちになる。」

老ひ八ツ手一つ下葉に喰ひさがる
大きみの虫の葉をさゆらがす

「雲の流れ」昭和五年

〔注釈〕

(注1)志賀直哉の別邸：原田京平は、大正三年に日本美術院洋画部の研究生となり、大正六年からは、かつて『方寸』や『パンの会』における中心的役割を担い、その後西欧やモスクワへ美術留学した洋画家山本鼎の指導を受けていた。また、大正初期は白樺同人による雑誌『白樺』の隆盛期でもあった。京平は、彼と同年に研究生となった村山槐多らとの交友を通して、『白樺』などの文芸・美術雑誌に紹介された諸々の西洋美術や新思潮から強い影響を受けていた。

日本美術院洋画部消滅後の大正一〇年、京平は静養と絵画創作とを目的に、妻睦と共に東京から千葉県東葛飾郡我孫子町(現　我孫子市)に移住、島田別荘を借りて転居した。ここで、夫妻は、白樺同人の志賀直哉・武者小路実篤・柳宗悦らと出会うことになる。特に、大正四年秋から同十二年三月までの七年半、我孫子町弁天山に居住した志賀直哉との出会いは重要で、二人の交際には誠に密なるものがあった。洋画家として、かつて、日本美術院洋画部時代に雑誌『白樺』が発信する熱と波を被った京平にとり、白樺同人が住む土地への憧れ、つまり、その土地において、自身の創作活動のための刺激と活力とを得ることを、心の内に秘めての移住であったとも想像される。

京平・睦夫妻が我孫子町にやって来たのは、大正一〇年一〇月である。この頃志賀は、代表作であり唯一の長編小説である「暗夜行路　前篇」を執筆、雑誌『改造』に連載中であった。翌大正十一年からは後篇に着手し、執筆意欲満々であったが、年末から執筆に行き詰まり自信喪失状態に陥った。そのような志賀を慕って近くに住み、志賀を側面から支えた、小説家や画家などには八人の人々(瀧井孝作、橋本基、原田京平・睦夫妻、高橋勝也、中勘助、木下検二、児玉素行)がいたが、なかでも志賀と京平・睦夫妻との往来回数は殊に数多い。この時期の志賀と京平との交友については、志賀の「日記」・「書簡」・「手帳」などに詳しく記され、また、八人の仲間の内の瀧井孝作による「我孫子の思出」(『志賀直哉全集』第三巻「月報」第六号　昭和十三年二月　改造社)にも活写されている。

やがて、志賀は、「本統に芸術に浸りきった、生活で心身を統一され」(「日記」大正十一年十二月四日)、書く気力を取り戻すことを目的として、大正十二年三月京都へ去る。その後、京平・睦夫妻が弁天山志賀邸母屋に移り、昭和三年三月東京世田谷若林に転居するまで暮らすことになる。

この件については、大正一四年九月、弁天山志賀邸生まれのミナミ・アストロゴ(南、夫妻の次女、洋画家)から「留守番に入ってもらうのだから只でよいと、志賀さんからは言われたが、母(睦)が毎月五円を送っていた」との教示を得ている。

この後、かねてよりの密かな願い通り、絵画創作のための強いエネルギーを得たかのような活躍を見せることになる。

「瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉宛書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料―」　平林清江『上智大学　国文学論集』第48号　上智大学国文学会(二〇一五年一月八日発行)

(注2)聚文画室(しゅうぶんがしつ)：昭和五年三月、原田京平が世田谷五―二八四九(現　加藤様邸＝東京都世田谷区桜丘四―九―三十六)に建てた住まい兼アトリエのこと。

原田京平の実名は京平であるが、その他三つの雅号があり、「恭平・聚文・和周」である。「恭平」は日本美術院洋画部研究生となった大正三年頃から、聚文は春陽会に参加した大正十二年頃から使用。和周は、晩年の雅号で、昭和八年頃から用いられている。

〈麻那が伝えた《原田恭平(聚文)像》との出会いと、調査の顛末〉平林清江(「我孫子・白樺派を継ぐ者―原田京平の生涯―」我孫子市教育委員会　平成二十八年三月発行収載)、図録「佐藤玄々〈朝山〉」(求龍堂)などより。

(注3)私が世田谷区世田谷五―二八四九に初めて足を運んだ昭和三十三年：昭和三十三年当時、東京都立大学法経学部経済学科の学生でいらっしゃった充子氏が、加藤家に嫁がれたのは、昭和三十四年九月のことで、当時の東京都立大学人文学部英文学科教授の佐伯彰一先生がお仲人をされたとのことである。

「佐伯彰一先生は「一九九五年四月に世田谷文学館が開館した時の初代館長。一九八六年十二月、世田谷文化会議から文学館建設等の提言を受け、一九九〇年十一月「文学館基本構想検討委員会」を委員六名で開催、その委員長が佐伯彰一氏。開館までの間、佐伯氏は費用の補助も含めご尽力され、東京二十三区で唯一、世田谷区のみ文学館の設立となった。さらに文学館設立の五年後には、佐伯館長は「友の会」の必要性を進言し、区内のインテリゲンチャを招集して、一九九九年四月に世田谷文学館友の会が発足された。世田谷文学館と世田谷文学館友の会は佐伯彰一氏なくしては存在しなかった。」

(世田谷文学館友の会企画委員(現・副会長)幾田充代氏提供・二〇二〇年二月十三日筆者あてメールより)

(注4)「原田　睦八十八歳自選画集」：原田睦については、シリーズ《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その1》の中で詳述したが、ここでは睦の最晩年に発行した画集「原田　睦八十八歳自選画集」について記すことにする。

著者原田睦、発行原田麻那(笠間市芸術村)、発行日昭和五十九年九月二十日、制作東美デザイン。画集に掲載された作品は一九五五年から一九八四年に作制発表された六九点である。発表展覧会は、国画会展、女流画家協会展、現代日本美術展である。画集発行を記念して、原稿を寄せた画家には、熊谷九寿、須田剋太、三岸節子、また、美術評論家の今泉篤男がいる。

原田喬氏の許可を得て、次に掲載した作品は「夜の呼吸」(一九六〇年　第三四回国画会展)、「月と広告塔」(同　第一四回女流画家協会展)、「円と花」(一九七六年　第三〇回女流画家協会展)、「日輪」(一九七九年　第五三回国画会展)、「花に生きる」(一九八一年　右第五五回国画会展・左第三五回女流画家協会展)の五点である。**(左は「夜の呼吸」と「月と広告塔」)**

「円と花」

「日輪」

「花に生きる」

「この度自選展をするに当たり、ささやかな画集を出版することになり、納戸に仕舞い込んだ画だけでも余りにも沢山あって、どれも捨てがたく、とうとう二〇〇枚近くも写真をとってしまった。年代順に並べてみると、日頃画の理論など何も言わぬ人ではあるが、「独特の自分の世界を持って大きな流れを指さしているのだ」と言う事が私の心にしみて来た。

〈母の肖像〉原田麻那

原田睦の作品は、ペンション「シャンブルドート・ピステ」(長野県茅野市車山高原:0266-68-2219)内の、睦ギャラリーで六〇余点を展示している。

(次号に続く)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

・美手連報告
手賀沼遊歩道沼辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物等について
(かっぱ噴水広場付近〜滝下広場付近まで)

牧田　宏恭(ひろゆき)(会員)

1. はじめに

手賀沼は長年にわたって、**「沼の水質浄化と沼を取り巻く流域の自然環境保護・回復」**をテーマに行政、市民団体、市民の手により種々取り組みが成されている。また、この大切な自然の資源を観光に結びつけようとの活動も見受けられる。しかし、これらの取り組みは、身近な問題として沼を大切にする人々の理解-協働があって成り立つのであって、意を解さない一部の人の行動が、せっかくの取り組みの足を引っ張り、進行を妨げている。

この現状の一端を報告させていただき、改善のために、どの様に捉え取り組むべきかの手がかりの緒としたく取り上げてみた。

2. 調査概要

私が、永年続けている「早朝散歩」の一つに、我孫子市・手賀沼親水広場「水の館」近い**「手賀沼遊歩道・かっぱ噴水広場付近」から「滝下広場付近」までの片道約1,500m**を、天候に恵まれた日に往復し、鳥・樹々・植物を見ながら、四季の移ろいを景色に感じ取る楽しみがある。

この最中、**以前より気になっているのが、この報告に取り上げた、遊歩道に沿った沼辺付近に長年放置・廃棄?されている多数のボート等の小型舟、モーターボート、観光船などの大型船、春に咲く見事な高野山の藤棚の眺望を台無しにする藤棚突き当りに設置・放置されている遊歩道脇の鉄板構造の大きな「コ」の字状囲い塀、その内側に隠れた放置舟、そして釣り人と思われる人が場所確保し、あちこちの設置している鉄パイプ製の堅牢な桟橋や桟橋風の構築物の多くは見栄えを悪くするより以上に、沼の「植生帯」付近の狭い水路の流れを止め、その周りに「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」などの外来水生植物の異常な繁茂を招いている。さらには、他の水生植物類の成長を妨げ、それによる太陽光の遮りも、いろいろな生物の生息へ大きな影響を与えていると思われる。これらが、折角の自然環境に悪影響を及ぼしている。**

このことから、今回、その実態(廃棄物・放置物・構築物の)を数量的に把握し、内容を別紙報告の通りに纏めた。

内容は、記載の一覧表・調査地域(区間)のマップ(google 地図使用に追記)・撮影写真の一例である。

表に示す通り、この区間にて**「廃船・放置船の数:22」、「工作物・構造物の数:17」の合計:39**になった。(その後、放置観光船らしき物件をさらに1件釣り堀園付近で発見し、**総数は40**となった。)

なお、**この区間は、流域の広い手賀沼のごく一部区域に過ぎず、全域の実態把握をすれば、かなりの数量に及ぶことが多いに危惧される。**

確かに従前より、この区間には、既に行政によって設置されている写真(「手賀沼遊歩道に見られる掲示パネル」:添付補足写真)のようなパネルと手賀沼に関わる行為についての「注意書」は数か所あるが、**モノの遺棄、放置、勝手な構築などの行為が「不法行為」なのに、それを強く取り締まる機能はほとんど期待できない。**

したがって、上記のような状況を招き、そのままとなっている訳だ。**先ずは「不法行為」を行った者は、自らの手で、名乗り出てこれらを回収することが先決である。むやみに、「税金」を投じる改善は、再発を招く。**

冒頭述べたように、この問題は日常の**「市民一人一人の環境認識・モラルそのもの」に起因する**ものであって、問題は根が深い。どうすればこのような問題を取り上げなくて済む世の中になるのか?

またこの内容は、調査(2023年3月から4月)後、6月初めの記録的集中豪雨によって、報告に若干の変動もあるが、夏を目前に、沼辺の「ヨシ」や「ガマ」「マコモ」などの植物が生い茂り、現在は放置・廃棄物が覆い隠され目につき難くなっている。

3. まとめ

なお、本件について先日(5月26日)、重要な布石としての第一歩がスタートした。

それは、「我孫子の文化を守る会」が籍を置く「美しい手賀沼を愛する市民の連合会(略称:美手連)」が、以上に述べた実態を行政の「千葉県」の管轄組織「千葉県柏土木事務所」に問題提起し、同署の当該幹部ならびに担当職員と「意見交換会」の場を持つことを、去る3月に企画し、「関係者に申し入れたことにより、実現したことである。

それにより「問題の重要性を共有し、改善のための取り組み上の問題点・方策なども共有する」取っ掛かりができた。これからは、我々が「県」「手賀沼流域の各市」など行政組織との協働によって、この問題を推進させていく「実効性・即効性」のある「アクション」が求められる。

また、期せずして「広報あびこ:5月16日号」に、「柏土木事務所」寄稿文「手賀沼の環境維持・保全にご協力を」との見出しで、「釣り台などは設置禁止」との記事が写真付きで掲載された。**「美手連」は「今年度の取り組みテーマ」の一つにこの問題を正式に取り上げることを先日の年度総会において決議した。**

「手賀沼の自然を守り、この宝を次世代に繋いでゆくために」市民参加で取り組み活動を広めたい。

次ページ以降に実施した調査内容を紹介する。

写真１－①

写真2－①

廃棄船･放置船･工作物･構築物等の位置図 （数字:写真番号）「Google マップを使用」

手賀沼遊歩道（かっぱ噴水広場付近～滝下広場付近まで）に見られる廃棄船･放置船･工作物･構築物等

（2023.04.01現在）

写真番号	撮影場所（遊歩道から）と位置	数量	内容説明	備考
1－①	しゃぶしゃぶ池･南付近	1	半ば沈みかかったモーターボート	
1－②	しゃぶしゃぶ池･南付近	1	放置船（？）長期に係留されたまま	
2－①	釣り堀「小川園」前付近	5	放置船･廃棄？（長期）	ﾏｺﾓ、ﾅｶﾞｴ等の茂みの中
2－②	釣り堀「小川園」前付近	1	放置？モーターボート（桟橋西南のパイプ工作物前付近）	
2－③	釣り堀「小川園」前付近	1	放置？ボート（桟橋西のパイプ工作物付近）	
2－④	釣り堀「小川園」前付近	1	放置船･廃棄？（長期）桟橋入口脇	ﾏｺﾓ、ﾅｶﾞｴ等の茂みの中
2－⑤	釣り堀「小川園」前付近	1	コーヒーカップ風ボート（桟橋左脇）長期放置	ﾏｺﾓ、ﾅｶﾞｴ等の茂みの中
3－①	釣り堀池から東50m余付近	1	釣り人が工作した簡易敷板（岸辺から1m離れ）	長期放置
3－②	釣り堀池から東150m付近	1	ボート･釣り堀池から東に約150m、船内部にﾅｶﾞｴﾂﾙﾉｹﾞｲﾄｳ	
4－①	「藤棚みち」手前50m遊歩道付近	1	パイプ組の葦茂み中構築物（農地に給水ホース引き込み用？）	長期設置（ﾎｰｽ歩道にあり）
4—②	「藤棚みち」突き当り遊歩道付近	1	幌を被った小型観光船（放置？、廃棄？）	
5－①	「藤棚みち」突き当り遊歩道付近	1	鉄板囲い構築物奥右、葦の茂み奥にボート	長期放置鉄板囲いの中
5－②	「藤棚みち」突き当り遊歩道付近	2	鉄板囲い構築物奥左、葦の茂み奥にボート	長期放置鉄板囲いの中
6－①	「藤棚みち」突き当り遊歩道付近	1	鉄板三方囲い構築物（他に樹脂パネル、船の一部）	長期放置鉄板囲いの中
7－①	花畑（旧市民農園）南前付近	2	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
7－②	花畑（旧市民農園）南前付近	1	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
7－③	花畑（旧市民農園）南前付近	1	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
7－④	花畑（旧市民農園）南前付近	1	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
7－⑤	花畑（旧市民農園）南前付近	1	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
7－⑥	花畑（旧市民農園）南前付近	1	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
8－①	花畑（旧市民農園東詰め）前付近	1	釣り人が工作した簡易敷板	使用後都度の撤去なし
9－①	旧市民農園東･雑木林、盛土畑前付近	1	放置？･廃棄？モーターボート（ﾅｶﾞｴﾂﾙﾉｹﾞｲﾄｳに囲まれる）	
10－①	旧市民農園東･雑木林、盛土畑前付近	1	放置？ボート（ﾅｶﾞｴﾂﾙﾉｹﾞｲﾄｳに囲まれる）	
11－①	旧市民農園東･盛土畑前付近	4	放置？･廃棄？ボート（ﾅｶﾞｴﾂﾙﾉｹﾞｲﾄｳに囲まれる）	
12－①	旧市民農園東･盛土畑前付近	1	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
13－①	盛土畑東側･住宅前付近（滝下広場北西隣接）	1	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
14－①	盛土畑東側･住宅前付近（滝下広場北西隣接）	1	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
15－①	住宅前田んぼ付近（滝下広場北西隣接）	3	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
15－②	住宅前田んぼ付近（滝下広場北西隣接）	（上記3の内1）	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
15－③	住宅前田んぼ付近（滝下広場北西隣接）	（上記3の内1）	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
16－①	住宅前田んぼ付近（滝下広場北西隣接）	（上記3の内1）	釣り人の構築桟橋（パイプ組の堅固構造）	長期放置
17－①	住宅前田んぼ付近（滝下広場北西隣接）	1	放置？･廃棄？ボート（歩道前の樹に隠れて）	長期放置
	廃棄船･放置船の数	22		ボート･モーターボート･小型観光船
	工作物･構築物の数	17		敷板･パネル･桟橋
	総件数	39		

（牧田　記）

写真4－②

写真4－①

写真12ー①

写真9ー①

写真6ー①

写真 13ー①

写真10ー①

写真7ー③

「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」に覆われている放置船（2023. 6. 23撮影）

写真 15ー①

写真 15ー②

以前から設置されている注意喚起の遊歩道のパネル（この掲示で不法行為を取り締まる機能を果たす役割は期待できない）

あびこだより１０７号

『明治天皇我孫子宿宿泊
―女化原演習天覧行幸記』

越岡　禮子

明治十七年十二月八日、近衛砲兵隊は茨城県女化原においてドイツ流の動的射撃の天覧演習を行った。目的はドイツに留学した砲兵士がその成果を試みることであった。

昭和五年、千葉県教育会はこの天覧行幸を一冊に記録した。この行幸記は我孫子にとって大変貴重な歴史的資料で、明治天皇が皇居を出発して演習をご覧になり、皇居に戻るまでの記録をまとめたものだが、我孫子と牛久でそれぞれ宿泊されたことが記録されている。我孫子で天皇の行在所となった松島屋（現、角松旅館）の当該建物は昭和五十六年に解体され、現在は新しい建物となっている。建物内の玉座のあった部屋の位置は、その後国道356号線拡張により現在では道路上となっている。

この資料からは、行幸に関わりのあった各町村の畏れと緊張をくみとることができて興味深い。準備や行程、我孫子滞在中の天皇と町民との交流や、牛久での行在所や女化原演習天覧の状況も行幸記に詳しく紹介されている。

明治天皇が我孫子に宿泊されたことは地元の古老がわずかに知るばかりであったが、「行幸記」が角松旅館に残されていたことにより『我孫子市通史』に記載することができた。また、近年、行幸時に使用された飯泉秀右衛門家の井戸が復元され、徐々に市民に知られるようになった。

以上

「放談くらぶ」で越岡禮子氏（当会顧問）が講演

日時　8月19日（土）14時〜16時

会場　アビスタ第2学習室

演題　『明治天皇我孫子宿泊

—女化原演習天覧行幸記』（詳細は右記）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（プロジェクト報告）
百人一首を楽しむ会（番外）

美崎　大洋

今月の歌（恋の歌その23）

音に聞く高師（たかし）の浜のあだ波は
かけじや袖のぬれもこそすれ　（72）

【現代語訳】

噂に高い、高師の浜にむなしく寄せ返す波にはかからないようにしておきましょう。袖が濡れては大変ですからね。

（浮気者だと噂に高い、あなたの言葉なぞ、心にかけずにおきましょう。後で涙にくれて袖を濡らしてはいけませんから）

【語句】

【音に聞く】「音」はここでは「評判」のことで、「噂に名高い」という意味。【高師（たかし）の浜】和泉国（現在の大阪府南部の堺市浜寺から高石市あたりの一帯）の浜。ここでは「高師」に「高し」を掛けた掛詞とし、「評判が高い」を意味させている。また「浜」は、「波」「ぬれ」の縁語です。【あだ波】いたずらに立つ波、むなしく寄せ返す波のことだが、ここでは浮気な人の誘い言葉のことを暗に言っている。【かけじや】「かけまい」の意味で、「波をかけまい」と「想いをかけまい」の二重の意味を込めている。「じ」は打消の意思の助動詞で、「や」は詠嘆の間投助詞。【袖のぬれもこそすれ】「袖が濡れる」というのは、涙を流して袖が濡れるという意味があり、恋愛の歌でよく使われる。恋する想いが嵩じて涙を流すということ。ここでは、波で袖が濡れるのと、涙で袖が濡れることを掛けている。「も・こそ」はそれぞれ係助詞で、複合すると後で起きることへの不安を意味する。

【作者】

祐子内親王家紀伊（ゆうしないしんのうけのきい、生没年不詳）は、平安時代院政期の女流歌人で、後朱雀天皇の皇女祐子内親王の女房、三十六歌仙の一人。**一宮紀伊、紀伊君**とも呼ばれる。従五位上民部大輔春宮亮平経方の娘とも、藤原師長の娘である堀河院御乳母典侍紀伊三位師子と同一人物ともいわれており父親は定かではない。母は「岩垣沼の中将」の作者で後朱雀天皇の第一皇女（祐子内親王）に仕えた祐子内親王家小弁（こべん）。紀伊守藤原重経（素意法師）は兄とも夫とも言われている。

紀伊自らも祐子内親王家に仕えた。紀伊の名前は、藤原重経が紀伊守だったところからきている。

「金葉集」の詞書では、この歌は1102年5月に催された「堀川院艶書合（けそうぶみあわせ）」で詠まれたようだ。「艶書合（えんしょあわせ）」というのは、貴族が恋の歌を女房に贈り、それを受けた女房たちが返歌をするという洒落た趣向の歌会。懸想文（けそうぶみ）合わせとも。

そこで70歳の紀伊に贈られたのが29歳の藤原俊忠の歌だった。

人知れぬ思いありそ（荒磯）の浦風に
波のよるこそ　言はまほしけれ

（私は人知れずあなたを思っています。荒磯（ありそ）の浦風に波が寄せるように、夜にあなたに話したいのですが）

「寄る」と「夜」、「（思い）ありその」と「荒磯（ありそ）」を掛けた技巧的な歌だが、これに対して答えたのが、冒頭の紀伊の歌。

29歳の若き俊忠が70歳の女房・紀伊に恋歌を贈るというのはちょっと皮肉な感じがする。周りも面白がったのかもしれないが、そこでこんな素晴らしく粋な歌を返されて、俊忠や歌会の参加者はどう思っただろうか？70歳の女房の歌の才能に思わず息をのみ、感嘆したのではないだろうか。

29歳と70歳の男女の恋歌の交歓。取り合わせの妙もさることながら、そこでこのような薫り高い歌が詠まれたことを想像すると平安歌人たちの遊びの典雅さに、羨望さえ感じる。

関連狂歌

赤飯をいざやくばらん鳥のふん
かけじや袖のぬれもこそすれ

鳥の糞をかけられるのは幸運の前兆という俗信があったらしい。目出度いことだから赤飯を配ろうという。

音に聞く舞台の上の化（あだ）ごとと
思へど目もと濡れもこそすれ

伏見まで高瀬の船のあだ波は
かけじや袖に苫（とま）を覆わん

音をきく尿（しし）のばばのきたなさは
かけじや袖のよごれこそすれ
ししは小便、ばばは大便

（参考文献）
淡光ムック　百人一首入門　有吉保・神作光一　監修（淡光社）
インターネット百人一首各種投稿文

四十一回短歌の会（最終採択の一首）

五月二十三日実施

オオバコと白詰草の生うる道
山頭火の句版画で映ゆる　村上　智雅子

静脈の青く浮き出し手を眺む
つくづく母に似たるわが手よ　納見　美恵子

タケノコの土佐煮さかなに「まあいいか」
引き返せない人生の穴　佐々木　侑

薫風の渡る船戸の古墳群
通路を歩き踏むなキンラン　芦崎　敬己

ガン治療継続するも自覚なく
病人らしくと妻に責められる　美崎　大洋

短歌とは果ては孤独を詠むものか
詩歌の森の迷子となりて　伊奈野　道子

殊更に遠出をさけてこもる日々
ただに過ぎゆき待ってはくれない　大島　光子

（特別寄稿）
将門の夢を求めて十五年
王城の扉いま開かれん　戸田　七支

文学掲示板

令和五年九月展示作品（文学の広場）

濃く淡く緑綾なす庭の木々
そよ風の来て吾を癒せり　八千代市　藤川　綾乃

電柱の陰に凌ぎし暑き陽（ひ）の
今は優しく我に注げり　我孫子市　美崎　大洋

防災に土手高くして沼見えねども
守りとなりて冠水少なし　我孫子市　村上　智雅子

農盛んなる友の故里の道の駅にて
妻に青瓜を買ひて帰りぬ　我孫子市　三谷　和夫

日の落ちて音とだえたる山の墓に
カナカナの声しみわたりたり　我孫子市　佐々木　侑

息吸へば五臓の隅まで染まるごと
城址の杜に若葉輝く　我孫子市　山崎　日出男

当会の行事予定

□「放談くらぶ」
日時　8月19日(土)14時～16時
会場　アビスタ第2学習室
講師　越岡禮子氏(当会顧問)
演題　『明治天皇我孫子宿宿泊
　　―女化原演習天覧行幸記』
参加費、会員無料、非会員三〇〇円
申し込みTEL(7185)0675　佐々木まで
（10ページ「あびこだより」参照ください）

□プロジェクト「短歌の会」
第四十二回短歌の会
日時　7月25日(火)13時30分～
場所　けやきプラザ10階小会議室
◎短歌に興味のある方、見学＆体験ができます。

我孫子市のイベントなどの予定

□白樺文学館の展示と講演会
展示「式場隆三郎ー見えない世界の美しさに心をよせてー」
期間　①7月15日～10月9日
　　②10月17日～令和6年1月14日～
場所　白樺文学館
講演会「式場隆三郎先生がご支援くださった日本点字図書館とは」
日時　9月30日(土)14時～15時30分
講師　長岡英司さん
参加費　無料、先着100名

五団体共同主催「市原歴史博物館」見学会

6月27日、郷土資料館の設置に向けた活動の一環で、五団体有志が昨年11月にオープンした市原歴史博物館を見学した。詳細は次号に掲載予定。

編集後記　マイナンバーを巡るトラブルが相次いでいることを受け、政府はデジタル庁、総務、厚生労働両省を中心とする省庁横断の「マイナンバー情報総点検本部」を立ち上げ、6月21日、第1回会合が開催された▼トラブルは人為的なミスが原因の大半を占める。国の定めた個人番号に市町村で保有するデータを結びつける際に、氏名と生年月日をキーにする訳だが、同姓同名ばかりか生年月日まで全く同じ人が複数存在するケースが何件もあったという▼子供に名前を付ける際、時代の世相を表す名前が、ある時期集中する例はよくある。古くはJリーグ開幕時の「翼」、荒木大輔の「大輔」、今は「翔平」だろう▼一口に「データの総点検」というが、市町村の職員が日常の仕事を持ちながらやるのは無理で、外注に頼ることになる。仕事自体は単純だが、注意力が要求される。責任の主体が明確でない作業だけに、システムの仕事をしてきた筆者としては、今からその結果を心配している。（美崎）